

青森博物研究会會報

第七號(昭和十三年六月)別刷

余の研究室で
害虫に襲はれた話

和田 千藏

余の研究室で 害蟲に襲はれた話

和田 干 藏

青森縣師範學校博物教室で腊葉や剝製その他の乾性標本を害する昆蟲にはヒメカツラブシムシ (幼蟲方言ズメ、ズミ)、ヘウホンムシ、イガ (方言テラコ)、シミ (方言ハクムシ、ハゴムシ)、マダラカマドウマ等があるが一番閉口したのはマダラカマドウマ、ヒメカツラブシムシの兩種であつた。以下これ等の犯行状況を物語り將來の戒めとしておき度い。

(1) *Attagenus japonicus* REITTER ヒメカツラブシムシ

この昆蟲は體長 4 耗内外、全體黒褐色の甲蟲で、六月になるとツツジとかニンジンの花に集り、標本室の窓を開放してゐると侵入して來て動物質標本に産卵する。産卵されたらもう最後で余は屢々これに泣かされた。一番閉口したのは昭和 10 年にモリアアガヘルの卵塊 (昭和 4 年採取) をよく乾してボール箱に容れて置いたのを喰盡された一件である。この箱にはナフタリンもホトゲンも容れずに毎年夏に乾して保存して來たのだが、この

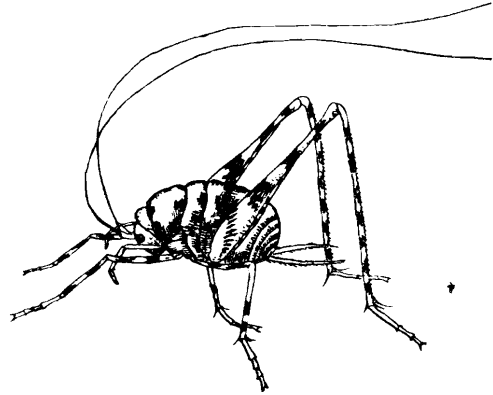
年思はず標本室の窓を時々あけた結果侵入されたので、6月中旬には別に異状がなかつたが9月下旬に取出した處無慘に喰ひ盡されどうも手の下し様がなかつた。別な硝子戸附の棚に容れたものも害を受け、その後12月になつてもまだ幼蟲が潜伏してゐたので火に投じて焼捨ててしまつた。家庭では身缺鍊、乾鱈、鰯等は随分喰害されるばかりでなく、毛布、洋服類に至る迄毫無しにされることがある。この様に標本を喰害するが一方に於て頗る巧妙な益を與へた事もある。それは水鳥の骨骸標本を奇麗に拵へてくれたことで、この業績は人間のとても及ぶ所でなかつた。頃は昭和の初め三月に捕つたマヒワ10羽位の屍を鳥屋から貰らつて解剖、材料にしようとし、一先づ昆蟲飼育箱内に乾いたミツゴケを敷いた其の上に置いたが、學年末の業務に追はれ遂そのままになつたので5月頃調べた時大半硬化してゐたから仕方がない乾固標本にして保存し様ときめたのだつた。所が9月にこの箱を使用する要があつて開扉した時思ひがけなくも9分通り羽毛が抜かれ翼の羽軸ばかり完全に残り頸椎や肋骨もはつきり残されてゐたのでこれを検査して見た所、下になつてゐたものはまだ内臓も幾分残つて居る事が判つたから、これを反轉して更に少し喰べて貰つたのである。この時には約30疋位の幼蟲が居たのでそのままに放置し、10月中旬に見た時には全部殆んど完全に有機物を喰へ盡し立派なマヒワの骨骸が多數出來たので、之を掃除して標本箱に納めて保存することにした。この時に初めて害蟲には絶対的のものはあるものでない事を體驗した。而してこの蟲は動物質中鳥の肉を一番好きな様に見受けられる。昭和10年の冬剥製したオホハクテウの標本を紙包にして大切に保存して置いたが、何にかの爲めに一部破れたのでこの裂口から7月上旬に30餘のこの成蟲が侵入し、白羽の表面にゴマ粒を置いた様に見へ早速取盡したが、どう考へても標本室の南側に花園があるために、ここから窓をあける度に侵入するとしか考へられない。以後は標本室の窓は換氣の目的で開くことを禁じた。これと同時に標本棚には多量のナフタリンとホトゲンを置く事にしたが、ホトゲンの方が遙に有效である。

(2) *Dicstrammena marmorata* de HANN マダラカマドウマ

直翅類、コホロギ科に屬する昆蟲でマダラオカマコホロギとも呼ぶ。體は多少腹面に屈曲し翅は退化してこれを缺き、觸角著しく長く脚も見事に發達して巧みに跳び且壁を垂直に攀登することが上手である。體は褐色で黒斑があつて體長は約3糎内外もある。性暗所を好み屋内に入り炊事場の

籠に多いからこの名がついたのだが、一般家庭でも農場でもさわぐ程の害を受けて居ない様である。

余の研究室には昭和 3 年から 6 年にわたつて毎年夥しく發生し誠に閉口させられた。それといふのは新たに蒐めた昆蟲標本と蠶の種紙が喰害されたことである。この様な話をするとなんか妙に思はれる気がするが、事實あつて困つた故にその状況を申上げ御参考とし度いのである。毎年 8 月



になるとセミ、トンボの標本を造るが、一先づ捕つたものを金網の籠に容れて置いて4・5日後に調べて見たら、20でも30でもどれも皆腹部は破られ内臓が空になつてゐるのに気がついた。初めネズミの仕業でないかと考へたがさうでもない、どうしても犯人は豫想がつかなかつた。それで以後は生徒の蒐めて來たセミは全部一時書棚の中に容れて保存した。9月の中頃に取出して整理し様として見たら、亦もや前記同様腹部が破られて役に立たなかつた。實に癪にさはつて戸棚の中にナフタリンを容れ驅蟲の装置をとつてしばらく戸棚の中を見詰めてゐたら、何處から來たのか一疋のマダラカマドウマの怪姿が現はれた。それでもまさか彼の仕業ではあるまいと思つたが、不取敢押へて昆蟲飼育箱に收容しこれに生のトンボとセミの乾いたのを入れて試験することにきめた。二日後に調べて見たらセミもトンボも全部前記同様に腹部が破られてあつた。ここに於て今迄の犯行者は全くこの鬚の長いカマドウマであることが判つたから、更に多數のこの蟲を集めて試験して見たが、益々これ迄の犯行を自白する様に明かにされて來た。そこで新に蒐めた昆蟲標本には全部ナフタリンを入れ密封して豫防策を講じ、その年はそれで打切りにした。その翌年には十分警戒をしたが一晩机上にセミをあげておいたら矢張やられた。今度は前年より敵の数が殖へた様子が見えたから驅除法を考究した。それは普通の蠅取紙を應用したので効果 100%であつた。即ち蠅取紙の中央部附近に錫の破片、鹽煎餅の破片やセミ、トンボの胴體を置き、これを研究室の隅々や戸棚の附近に 6枚を

布設したが、翌朝調べて見ると驚く勿れ各紙に多いのは8疋、少いので2疋といふ風に粘着し、合計29疋の犯行者が脚を並べて縛られ夢中になつて長いひげを廻旋してゐた。それから一週間をきにこの方法を繰り返したがだんだん小形のものばかり集着する様になつたから10月の中頃に止めた。所が冬になつて室内の氣温が攝氏10度位の時には時々小形のもが床板を跳躍するのを見たので、發生源地の探索に取掛つた。それは床の下部の水道栓の木框が腐つてボロボロになつてゐたので、そこを搜して見たらやはり小形のもが澤山かくれてあつたから、集めてストーヴで焼捨てた。

次に奇妙な害を受けたのは昭和4年の秋から冬にかけての事である。それは大正12年から蠶の遺傳研究のため毎年飼育して僅宛の種紙を造つてゐたのだが、この年の蠶種(框製13蛾分)を例年通り北側の壁、高さ4米の所につるして置いたのである。それが9月には異常なかつたが10月になつてから2區位發生後の様な色彩になつたので不思議に思ひ注意してゐた10月中旬になると次第に異常部が多くなつたのでこれが被害部を検査したが、卵殻面に小孔を穿ちて内容を吸取つたので、残り只3蛾分に要をおきこれを他の東壁2米の高所に吊るし、その下方に毎日歸宅の際に白墨の粉を篩ひ犯行者の足跡を認めんことに注意したが、足痕はととも認められなかつた。その間に例の蠅取紙を種紙の下方に布設したがこれにも觸れるものがなかつた。所が10月下旬(26日)の朝少し早く出校してその種紙を見たら、亦もやその附近に一疋のマダラカマドウマが壁面に止つてゐたから果ては怪しげな物と、捕蟲網で取り又飼箱に移し問題の種紙を容れて試験を試みた。4日後に検査したらやはり残りの3框の蠶卵は前記同様に空になつて居たので、ここにはじめて蠶卵を害したのもこの奴だといふことが判明した譯である。今迄の遺傳實驗も全く水泡に歸したので残念ながらこれ迄の事と諦めてしまつた。

この様にマダラカマドウマは一般の人々に知られてゐない犯行を、余の研究室で敢行したのは彼等の罪ばかりではなく、余の不注意も充分あつたことを告白するのである。爾來標本類は凡べて戸棚の中に全部納め且ホドゲン錠を十分に入れ、水道栓を修理し棚類の裏の隠れ場所も清掃した結果逐年その數を減じ、昭和12年度は只6疋を認めて捕獲したに過ぎなかつた。

要之私の研究室で害を逞うした害蟲はヒメカツラブシムシとマダラカマドウマで、外のイガ、シミ、ヘウホンムシ等はホドゲン錠によつて充分驅除豫防が行はれたが、マダラカマドウマは蠅取紙で食物誘殺をして驅除することを知り得た。ヒメカツラブシムシは標本室の窓をあけない様にし且

標本は棚中に置きホドヂンを入れると有効であるが、時には骨骼標本を造つて貰つて幸した事もある。そこで過去にさかのぼつて考へると時々貴重な昆蟲標本を机上に置き忘れ、一夜にして針を残しただけで全部喰害されたこともあつたのであるが、これはネズミの仕業ではなく姿に似合はぬ犯罪を逞うするこのマダラカマドウマの所爲であつたことが判明した。どうも油斷の出来ないこの室内害蟲、八月下旬から標本はホドヂン錠を入れて注意して保存し蠅取紙を布設してその進路を防ぎ、斷乎と標本室を守らなければならぬ。